

内科・糖尿病内科 担当医師 井口昭久教授の記事が掲載されました。

(名大医学部学友時報 第731号 2010年12月22日発行)

人生
山あり谷あり

第3回 「笑いの哲学」

名古屋大学名誉教授
愛知淑徳大学教授

いぐち あきひさ
井口 昭久

私の現在所属する所はスポーツ健康医療科学科という。

同僚の教官にはスポーツの指導者が多い。新入生のオリエンテーションで教官の自己紹介があった。「私は陸上をやっていました」などと教官は自分を紹介した。私は「学生運動をやっていました」と言った。新入生たちは全く反応しなかった。

我々の学生時代は、学生運動に関わるか、見て見ぬふりをするか、大げさに言えば生死にかかわる問題であった。いつの世でも革命はあり、そこに関わるか否か、永遠に解けぬ問題は永遠に学生と言う世代に引き継がれてゆくと思っていた。しかし今や「学生運動」という言葉すら忘れ去られてしまった。時代は予測できなく変化する。

最近の学生たちにとって、「学生運動」という言葉は「学生がスポーツをする」という普遍的な語彙になったようだ。私はバツの悪い思いをした。

相手を笑わそうと思って笑ってくれないときほど居心地の悪い事はない。立場を失ってさらに余計なことを喋ってしまう。

私は老人の集まる講演会で講師を務める機会が多い。「最近の私どもの研究によると、昼間眠る人は寿命が短いことが分かってきました。ことに講演会の会場で眠る人は早く死ぬことが分かっています。だから寝ないで下さい」と言うと、必ず笑いが起こる。そして講演の終わりに、「その話は本当ですか?」と、わざわざ聞きに来たおじいさんに、「嘘に決まっているじゃない、と答えた」と、話をすると二度目の笑いが起こる。

しかし大学の授業の始まる時に、「授業で眠ると早く死ぬので眠らないように」と言っても何の反応もない。そこで慌てて「冗談だよ、冗談」と補足しても笑わない。「笑ってほしいんだけど」

と言うと冷めた視線が返ってくる。

笑うという行為は正直である。反射的な表現なので嘘がない。

講演会では、誰かが口火をきって笑うとそれに続いて笑いが起こる。一度聞いたことがある人は同じ冗談には反応しない。笑いは感染症に似ている。聴衆の中には全く笑わない人がいるが、ある種の免疫を持っているのであろう。

最初に大声で笑った人はズット笑い続ける。また何か面白い事を言わないかと期待して身を乗り出す。

ベルグソンは笑いの哲学と言う本で「笑いは小川の流れるに生まれる渦のようなものだ」と言った。多くはまじめな話をしてその中に時折ユーモアを交えるのがコツである。15分に1回が効果的である。

予め伏線を用意しておいてそのうち面白いことを言いそうだと思わせて、期待を裏切らないことが肝要である。

真面目な顔をしてとぼけたことを言うと、その落差は効果を補強する。聴衆に与える初対面の印象が悪いほどよい。

講演会の最後に司会者に「漫談のようであった」と言われると「内容がなかった」と言われたようで、落ち込むのが常であるが、その覚悟はしておかなければならない。

そして聴衆は多様性であることをわきまえておかなければならない。私の講演では、老人クラブの60歳代の女性が最も笑う。同じことを文化クラブでやると、初対面の印象の悪い奴かとぼけたことを言っていたという印象になる。

私の仕掛けた「渦」に反応する人は私の感慨に近い人である。だから大学の女子学生は全く反応しない。